

## 鳥山石燕『画図百鬼夜行』風の巻を読む（その二）

倉 本 昭

「わいら」から「おとろし」へ

前稿で石燕描く正体不明の化け物「わいら」について論じた際、それが獅子頭に似た頭部に描かれていて、狛犬の頭を思わせる「おとろし」と見開きで並ぶ点に、絵師のこめた作為があることを指摘した。

石燕が影響を受けたらしい「百怪図巻」（またその系統の絵巻）では、既に「わいら」と「おとろし」が並んでいるけれども、石燕はその順を踏襲した上に、両化け物を神社の境内で相対する獅子と狛犬に見立てるユーモアを加えたのである。

「おとろし」は、「百怪図巻」のデザインに従っていて、既にそこでも頭頂の毛が一塊長く伸びて垂れているのを、狛犬の頭のとっぺんに生えた角に見立てているあたりが巧みである。「わいら」が阿形、「おとろし」が吽形となっている。

石燕画で「おとろし」が右手につかむのは鳩である。これが読

者（鑑賞者）には謎解きのヒントになっている。鳩に縁ある神といえは八幡神である。これについては、たとえば『八幡宇佐宮御託宣集』霊・巻五に以下のような話が載っている。（注1）

豊前国宇佐郡菱形池辺、小倉山の麓に、鍛冶の翁がいて、奇異の瑞兆を見せ一つの身に八つの頭を現わしていた。これを聞いた人々が実見しようと出かけると、五人行っては三人までが死に、十人行っては五人までが死ぬ有様で、畏れて行く人がいなくなった。そこで大神比義が確かめに行くと、金色の鷹が林上にいた。大神が丹誠をこめて祈り、正体を問うたところ、鷹が忽ち金色の鳩と化し、飛来して大神の袂上に載った。

また『八幡愚童訓』には（注2）

鎌倉ノ前右大将、平家ノ悪逆ヲ誅シ、仏神王民ヲ助ント、八

幡大菩薩ヲ一心ニ憑マヒラセ給ケレバ、初度ノ打手ヲバ、水鳥ニ鳩交リテ追帰ス。結句ノ合戦ニハ、白幡天ヨリ下リ山鳩空ニ翔ケリ。承平七年十二月十七日ノ御託宣ニ曰、

「舍衛国ニ四闘牙ト云フ所有リ。其所ニ諸仏菩薩集リテ説法シ給フ、其所ニ紫鳥ト云フ鳥有リ、日ニ三節廻テ鳴音ハ説法音楽ノ如シ、其鳥ニ我ハ化セルゾ、其ヲ凡夫ノ眼ニハ鳩ト見ルゾ」

ト告給ヘバ、鳩ハ是吾神ノ御変身也。

とある。しかし、これらの書によるまでもなく、石燕はごく常識的に八幡神と鳩との関係を知っていたのであり、『和漢三才図絵』に以下のような記述があるのを引いておけば、当時の知識人が八幡宮の鳩をどう捉えていたかがわかるというものであろう。

八幡鳩 止之与里古伊……（略）城州八幡山最多、俗以為神使、好事者書八字彷彿鳩之雌雄、八幡生土人、誤食之則唇脹腫悶乱矣、蓋此神与人相感令然者乎。（卷四三林禽類「班鳩」の項目）  
以上のことから「おとろし」は八幡宮の鳥居上で鳩を掴んでいるととれる。多田克己は既に「おとろし」と八幡神との関係に言及しているが、鳩への襲撃を「八幡信仰の禁忌」に關係する暗示ではないかと推測している。

しかし、そもそも八幡宮の鳥居の笠木の上に妖物を置くことが冒瀆的である。絵を見る者が洗神的な図柄に軽い衝撃を覚えながらも、何か含むところがあるのか読み取ろうとするのを、石燕は

狙っているのではないか。

石燕が活躍した江戸の八幡宮といえは深川の富岡八幡宮がまさきに思い浮かぶ。八幡門前は勿論、岡場所として知られる。『画図百鬼』出版当時の深川岡場所の様子については、安永元年に書かれた平賀源内の『吉原細見里のをだ巻評』に語らせるのがよからう。

深川に遊んで深川の穴をしらず。夫彼地の女良は鞍替ものありつき出しあり。甚しきに至りては人の女房を売もあり。或は女郎の身で新子をかゝゑ、我身を買てめぐりを打、掛金百落しの下卑有ていけもせぬ癖人を茶にし、客の前にて囁合、一字はさみであて付たり、歌の唱歌の耳こすり、亭主の身替りのれん替、前の家名は風呂敷に残り……

と源内は手厳しい。しかし、『婦美車紫鹿子』では上品下生之部に深川仲町が筆頭にあげられ、

此浄土は素人といふたて甚花車風流を好しが今は一向に衣装髪の風伊達に成り人からも尤あまりよくなし。しかしさわぎ一事は爰にこす所なし。

とあって、仲町に並び、深川表櫓・裏櫓・裾継が入る。さらに

佃と新大橋・新地・石置場・八幡御旅所が中品中生之部、入船町が中品下生之部に入る。そして以下のように総評される。

## 二 塗仏

わたくしも此春焼まへにさそわれて仲町へまいりましたが、先深川の客はさつさおせ／＼きたさのさとさわぎで、せんかうがたち切とずいとかへるが、深川のため、そこで女郎もうは／＼うはついで、なか／＼しつぽりとおちついたあそびはなりませぬ。<sup>(注7)</sup>

深川の岡場所全盛期は更に時代を下るが、安永のころ、その殷賑への端緒が開けていた。八幡宮一の鳥居をくぐり、まっすぐ伸びた道の両側に形成された門前町を中心に、『紫鹿子』が紹介する色町があった。

「石燕描く「おとろし」は、八幡宮の境内へと二の鳥居をくぐる前に、遊客をひっつかむ色町の女であり、わしづかみにされた鳩は、参詣にかこつけて、うかうかやってきた男たちが、岡場所の女のエサになることの風刺だと思われる。掴まれたら最後、逃れられぬところが「おそろしい」、すなわち「おとろし」ということになろう。振り乱した「おどろ髪」は、妖異性をあらわす一方で、「人柄が悪く」「浮ついた」深川岡場所の女の性根を揶揄するのであろう。

「おとろし」が神社の狛犬に見立てられていたことから、神から仏に転じて「ぬりぼとけ」を出した。

「百怪図巻」及びその系統の絵巻「化物づくし」に見る「ぬりぼとけ」と、石燕描くそれとは全く異なるデザインであることに注意したい。まず「百怪図巻」「化物づくし」の「ぬりぼとけ」から検証したい。

そこに描かれる妖物の特色は、①全身漆黑、②肥満体、③頭頂の中央に大きなくぼみがある、④巨大な眼窩から目玉が飛び出て垂れさがる、⑤腰に白布を巻く、⑥背中から魚の尾びれのようなものが生えている、といったものである。

この図像から想起されるのは、『和漢三才図会』巻十四「外夷人物」の「崑崙層斯」の項に付された人物図である。肌の色、腰に白布を巻いて上半身裸体であるところなどは共通する。しかし、体軀は中肉型で短髪をたたえている。当然、「百怪図巻」の大元となったという狩野元信筆絵巻（現存せず）と『和漢三才図会』自体は何の関係もない。「崑崙層斯」挿絵の図像学的ルーツは、寛文十一年林次左衛門版『万国総図』の「きねや」国人図あたりに求められるのかもしれないが、そちらを見ても「ぬりぼとけ」の元になるような図には見えない。

注目しておきたいのは、『文肝抄』に掲げられた河伯像<sup>(注8)</sup>である。

①全身漆黑、③頭頂の大きなくぼみ、⑤上半身裸で腰に布を巻く

という点で「ぬりぼとけ」と共通する。興味深いのは、河伯の大きな目が真っ赤に塗られていることで、唇の朱とあわせ、黒い体と鮮やかな対照をなして印象に迫ってくる。「百怪図巻」や「化物づくし」の大元となった絵巻の作者（佐脇嵩之の「百怪図巻」奥書には狩野元信とする）は、『文肝抄』に出るような河伯像をモデルにした可能性がある。河伯は水精とされるから、これをモデルにした「ぬりぼとけ」に魚の尾びれのようなものを描いたのかもしれない。

しかしながら、石燕には、さようなことを理解する余地はなかったのか、「塗仏」を全く異なる図像で描く。体軀は中肉型、頭にはくぼみがなく、頭のとっぺんは禿頭で、それより下の部分に毛髪が生えさがっている。尾びれ状のものは仏壇の引き戸に隠れて描かれない。

石燕は恐らく、南蛮屏風類に描かれた宣教師の図像をモデルにしたと思われる。彼が直接扱ったものは特定できないが、たとえば、現在宮内庁に所蔵される「南蛮人渡来図屏風」を見ると、南蛮寺の祭壇の前に集まる宣教師の中に、石燕の「塗仏」に相似た顔が見られる。<sup>(注9)</sup>

筆者は「ぬりぼとけ」の図像について推察を重ねたが、「ぬりぼとけ」とはいかなる化物であるかは不明としか言いようがない

い。体が黒漆色をしている羅漢のようだから絵巻に「塗仏」と呼ぶまでであろうし、後は図から様々想像をめぐらすすはかあるまい。不信心で悪行を重ねる者に「仏の目を抜く」の語を使うが、これは「仏の目が抜ける」妖怪だから、信心者が肝をつぶして、鉦や仏花を打ち捨てて遁走したということか。

### 三 濡女

濡女は磯女などの水妖と取り合わせて、民俗学的情報に富むだけに、それにとられすぎて説かれる嫌いなきにもあらず。

先行文献を繰るに、濡女の解説に紹介される例話は、きまつて、岡田建文の「石見牛鬼譚」（郷土研究）七巻五号一九三三（一）に引く島根県安濃郡太田町、那賀郡浅利村の伝承である。しかし、さようなものを江戸の石燕が把握するわけではない。また藤沢衛彦『妖怪画談全集 日本編』上に紹介する越後と会津国境の川に現れた濡女の話は、文政二年のことあるから、これもやはり、石燕の聞き合わすところではない。

濡女とあわせて語られる磯女・海姫にしても、長崎県の言い伝えを見るかぎり、石燕描く如き蛇体の化け物とは受け取れない。<sup>(注10)</sup> また、いずれも近代になって民俗学研究者が報告したものである。出雲の海女房も同様。

そこで、全く別の視点から濡女を見てみよう。

筆者は一連の論考において、『画図百鬼』の各妖怪は、一つ前

に登場する妖怪と何らかの形でつながっているという説を主張している。濡女についても同様に考えてみる。

たとえば酒井家旧蔵本「賢学草紙」を見てわかる通り、般若然とした顔に長い髪を垂らし、舌を吐いて川に臨む蛇体の化物は、道成寺伝説と不即不離の関係にある。石燕の濡女図を見て、江戸時代の多くの読者は、清姫の名で通る、怖ろしくも可憐なヒロインを想起したはずである。そこから逆に塗仏を見直せば、黒く焼かれた安珍に見立てていてのではないか、と思われる。

「道成寺縁起絵巻」諸本中、一般に目にする機会が多い道成寺本を、道成寺の公式ホームページの「絵とき体験ページ」で見たらわかる通り、鐘の中から僧（安珍の名はない）が骨に近い状態の焼死体になって現れる図のインパクトは強い。道成寺本系の絵巻を通じて、はたして石燕は、この図柄を知っていたか。

彼の場合、後に出版する『今昔百鬼拾遺』に描く「道成寺鐘」図では、「賢学草紙」の大蛇像を参考にしている。「賢学草紙」では、僧侶賢学が日高川の深淵に引き込まれるので、鐘と一緒に焼かれる結末がない。石燕が道成寺本系統の絵巻に触れていなかった可能性はあるが、安珍焼殺の結末は存知していた。先の「道成寺鐘」図の詞書には「安珍がつり鐘の中にかくれ居たるをしりて蛇となり、その鐘をまとふ。この鐘とけて湯となるといふ」とあるからである。ちなみに、これは能「道成寺」による知識であっ

た。<sup>(注13)</sup> よって、石燕の塗仏は、黒く焼かれる安珍のパロディとして、描かれていると考えたいのである。塗仏は鐘ならぬ仏壇から異形をあらわすのが滑稽につながる。

対峙する濡女は日高川を前に蛇と化した女である。『法華験記』など道成寺伝説を語る説話文学にいう「寡婦」は、若い僧に懸想して濡れかくるわけだから、「濡女」の名称にふさわしい。「百怪図巻」「化物づくし」に載る濡女を、石燕は道成寺伝説にひきつけて描き直し、読者に呈したのである。

#### 四 むらりひよん

「むらりひよん」は現在、人気のアニメや漫画を通じ、『画図百鬼夜行』風の巻で最も人口に膾炙した化物となっている。<sup>(注14)</sup> しかし、知名度が高い一方で、全く正体がかめないという、これほど不思議な化物はない。「百怪図巻」で「むらりひよん」を見ても、詞書がない以上、何ら確とした情報は得られないが、先人による妖怪研究の成果に照らして、「むらりひよん」図を読み解いてみる。

この化物は好色風俗と絡めて説かれることがあるが、その発想を「妖怪図巻」「化物づくし」の図に適用するのはいかがであろう。多田克己によれば「ヌルヌルしてヌ（ノ）ッペラ坊のようなものだと語られる。」「ヌッペラボウは目口の無い化け物、掴みどころのないさま、隠語では陰茎、張型の意で、「むらりひよ

ん」も同じ意の隠語だったようだ」という。「ぬらりひよん」という語そのものに好色的なニュアンスが籠められているというなら、両絵巻に描かれた「ぬらりひよん」のトレードマークたる大頭に、好色的なニュアンスが隠れていると指摘してもよいと思う。

しかし、依然として「ぬらりひよん」の正体や属性ははっきりせず、それを石燕がどう解釈して図像化したかが、『画図百鬼』の興味深いところである。

石燕は大蛇と化した清姫といってよい濡女から、再び僧を連想して、僧形の「ぬらりひよん」を次に置いた。並ぶ妖物の名の頭に「ぬり」「ぬれ」「ぬら」と似た響があるのも、石燕が意識して三体を配置したことをうかがわせる。

さて、石燕描く「ぬらりひよん」のポイントは①剃髪、②立派な羽織、③帯刀の三点。

図の背景に描かれたものでは④駕籠が注目される。

以上の四点から、筆者は石燕画「ぬらりひよん」は当時の官医に見立てられているとみたい。『守貞謄稿』に「江戸は官医剃髪にて法印・法眼に任じ、十徳を着し、平日は羽織なり。故に乗物を狭くす。江戸、官医にあらざるも、皆これを学ぶ」と見え、医師乗物の図も掲げている。

帯刀については正徳五年序『閑際筆記』巻六に「蓋し若者無刀、今小腰刀ヲ帯」とあるし、『塵塚談』上には著者小川頭道二十歳

の頃の話として「官医の衣服之事我等二十歳頃迄は御城の外他行の節は脇差計御紋服は各別自紋は殿中にて坊主に紛るゝとて決して着せず……寛政年間迄は脇差のみにて歩行し人もありけり、家内にては旦那様と称しけるに、近歳に至自紋の服刀は離さず、其上二殿様と称し、若党ハ定袴にて召遣ひ全く武家の様体になりしなり」とある。『塵塚談』のいう「近歳」は文化年間だから、『画図百鬼』刊行に近い頃の官医の実態を探ってみよう。

『画図百鬼』刊行前に官医をめぐるトラブルはなかったかと、服部敏良「江戸時代医学史の研究」（吉川弘文館 一九七八）付表Ⅱ「江戸幕府の医官譜」をのぞいてみるに、安永元年に神田佐久間町の医学館が火災に遭ったとある。当時寄合医師で多紀家を継いでいた元恵は再建資金の勸進を願ひ出て許され、二年五月十日に御触が出た。御触書は『三田村鳶魚全集』「お医者様の話」の「叱られた半今両家」（中央公論社第十四巻三二四頁）に引かれているので参照されたい。触では「御医師之分者存奇次第、其外御医師之弟子並陪臣町医師、惣而江戸中醫師よりは二匁を限、年々寄付銀差出」すよう命じている。しかし、寄付をしぶった医師が多く、八月五日には「今以不相集候間、諸医師より寄付物可有之条、遠江守殿（筆者注…若年寄加納久堅）」より仰せ渡されている。また九月二四日には半井・今大路の両典薬頭が、「兩人儀美術修行之場所出来候義、不得心の趣相聞、不埒の心得に候」と酒井石見守屋敷において叱責された。典薬頭たちが、自分たち

の権威をゆるがしかねない医学館の存在を煙たがったのは当然であつた(鳶魚による)。

ところが「江戸幕府の医官譜」によれば、安永四年、『画図百鬼』跋文が秋に書かれた年の五月十八日に、多紀元惠は出仕を止められた。理由は「その奴僕の犬と町の犬と闘いしより争論起り、市人を打殺せしによる」と見える。

それより後、安永五年七月九日の項目を見るに、「寄合医師細川宗仙某遠流せらる。常に博戯をなし亡命の者どもを己が家に宿せしによる」とある。八年八月一日には小普請医・須磨良川が身持ち正しからずとの理由で遠流されている。

文化十三年成だから『画図百鬼』よりずっと後の資料ながら、『世事見聞録』卷三「医業の事」<sup>(巻三)</sup>を参考に掲げる。

当世の医師は御代の結構過ぐるに任せて、医術の修業怠りて奢侈に募り、衣服美麗を尽し、住所も玄関書院其外結構、家従郎迄も権威を張り、家内賑かに暮し不行状を尽し……殊に官医又大小名の医師などは別して権高く、病家へ見廻るにも、駕に乗り、若党陸尺、其外の供廻り、武士の如く、又医者の供廻りとて一風替りて当世の流行医故障用の鬧敷体に見せなすとて道を急ぎ走りて却て武士の往来よりも騒敷、行違に人を悩まし、或は喧嘩を仕かけ……

ここに書かれているのと安永年間も似た状況ではなかったか。医学館再建をめぐる紛擾に加え、行状よろしからざる官医どもの処罰。江戸の絵師・石燕は、そんな情けない実状をくんで、ぬらりひよんを墮落した官医に見立て、風刺したのではなかったか。ぬらりひよんが法体であるから、官医にひきつけるのはたやすかつた。<sup>(註20)</sup>

次に、「ぬらりひよん」という名称が墮落した官医とどう響きあうかを考えてみる。

ぬらりひよんの解説によく引かれる『好色敗毒散』卷三の三「世をすて人」からの用例には「その形ぬらりひよんとして、たとへば鯨に目口もないやうなるもの、あれこそ迂詐(うそ)の精なれ」とある。従来の解説書は小学館の『日本国語大辞典』から、この用例をとって、『敗毒散』自体には目を通していないようにも思われる。

「世をすて人」は、隠者の道を選んだ主人公が色里への思いにかられ、新町に出かけて様子を眺めるうち、夜も大層上げたので揚屋の軒下で睡りにつくと、百鬼夜行と出会い、化け物を引き連れる翁から百鬼の正体を教わるという話である。

先の引用の前には「その色何とも見わけがたく」とあり、さし(註21)絵を見ると、翁の傍に地面にへたりこんだ「うその精」が描かれる。身体は人間で、頭は目鼻のないナマズ、口はきちんと描きこまれ、人間と同じ耳がついている。顔が真っ白な、一種ののっぺ

らぼうである。こんな妖ナマズのヌルヌルしてつかみどころもない形貌を、作者は「ぬらりひよんとして」と表現している。「迂詐うそ」というのは遊女が客を手玉にとるウソのことである。遊女が手管でつくウソは、真偽の程がつかみがたく、まんまと客はだまされるのが落ちで、後で責めてもぬらりくらりとかわされるから、ぬらりひよんとした化物に形象化しているのである。

では、ぬらぬらするものうち、ウナギやタコではなく、なぜナマズに喩えられるのか。

『日国』で「ぬらりひよん」の類語を見ていくと、「ぬらくら」の用例に『松翁道話』五の中より「瓢箪でなまずおさへるうその川 押さへて聞けばとかくぬらくら」の付合が掲げられている。ウソの皮を押さえて引き剥がそうにも、相手はぬらりくらりと逃れて、瓢箪なまずのように埒があかない。『敗毒散』の例とあわせ、ナマズとウソがつながっていることに気づかされる。

ぬらりひよんの「ひよん」は瓢に通じ、「ぬらり」はナマズにつきものだから、「ぬらりひよん」という語には、瓢箪なまずのイメージがかぶさってきて、「つかみがたい」「とらえがたい」という意味になる。客を意のままにするのが商売の、それ者のウソの皮はつかみがたい、まるで瓢箪なまずだ。『敗毒散』の「形ぬらりひよんとし」たウソの精がナマズのようにだとされるのは、そんな発想からきたものではなかったか。

かくして、ぬらりひよんはウソ、更にでまかせということにも

つながろう。

そうすると、墮落した官医が患者の脈をおさえても、瓢箪で鯨をおさえるように、兎角要領を得ず出任せな診断を申渡しそうだという寓意を、石燕は「ぬらりひよん」図に託しているのかもしれない。

『画図百鬼夜行』テキストについては、これまでと同様、角川ソフィア文庫『鳥山石燕画図百鬼夜行全画集』および国書刊行会刊『画図百鬼夜行』（高田衛・稲田篤信解説）を使用した。「百怪図巻」は京極夏彦文・多田克己編・解説『妖怪図巻』（国書刊行会）に拠った。

#### 注

- 〔注1〕『神道大系神社編四七字佐』（一九八九年神道大系編纂会）六三頁。原漢文は、たとえば国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベースで大和文華館本のデジタル画像データが公開されている。また山口大学学術機関リポジトリYUNOCCAで「八幡宇佐宮御託宣集」託宣・示現年表」（吉田真樹・柏木寧子・栗原剛・上原雅文・佐藤正英作成）が公開されている。

〔注2〕岩波書店『日本思想大系二〇寺社縁起』一九六頁。表記は筆者が改めている。

〔注3〕影印は明治三十九年吉川弘文館版を利用。

〔注4〕季刊「怪」第七号 一九九八年三月「絵解き画図百鬼夜行の妖怪」

(注5) 岩波日本古典文学大系五五『風来山人集』二九七頁

(注6) 『洒落本大成』六一四三、一四四五頁

(注7) 同書一五二頁。句読点は筆者

(注8) 陰陽道に関する啓蒙書でも見かける図像であるが、筆者は京都府立総合資料館本の河伯像をカラーで掲載した『安倍晴明と陰陽道展』図録(二〇〇三年読売新聞大阪本社発行京都文化博物館・郡山市立美術館・読売新聞大阪本社編)を参照した。『文肝抄』は写本で他にも伝わる。

(注9) 『江戸時代図誌』二五長崎・横浜(一九七六年筑摩書房) 口絵4

(注10) 村上健司『日本妖怪大事典』(角川書店二〇〇五)

(注11) 国際日本文化研究センターの「怪異・妖怪伝承データベース」を参照

(注12) 『日本絵巻物全集』十八(一九六八年角川書店)に写真版収載。

(注13) 『大日本法華経験記』『今昔物語集』『元亨釈書』では、寡婦が鐘ごと若い僧(『元亨釈書』には安珍とある)を焼き、骨も残さず灰にしたとある。『法華験記』下百二十九「紀伊国牟婁郡悪女」  
「即汲水浸大鐘冷炎熱見僧皆悉焼尽骸骨不残纔有灰塵矣」『今昔物語集』巻十四「紀伊ノ国道成寺ノ僧写法華救蛇語」  
「大鐘、蛇ノ毒熱ノ氣ニ被焼テ炎盛也。敢テ不可近付ズ。然レバ水ヲ懸テ鐘ヲ冷シテ鐘ヲ取去テ僧ヲ見レバ、僧皆焼失テ骸骨尚シ不残ズ纔ニ灰許リ有リ」  
『元亨釈書』十九願羅十之四靈怪六「安珍」「蛇乃蟠圍鐘斧尾敲鐘火焰迸散寺衆集看無争如何移時蛇去寺衆倒鐘見中不見珍又無骨只灰塵而已。万治刊本『道成寺物語』  
「あんちんほうし、みやうくのはけぶりに身をこがされて、はくこつばかりぞ、のこりける」

(注14) アニメ「ゲゲゲの鬼太郎」には石燕画由来の「ぬらりひよん」が登場する。しかしアニメ「妖怪ウォッチ」の「ぬらりひよん」は最早老人の姿ではなく、エンマ大王に側近として仕える美形のキャラクターであり、実写映画「映画 妖怪ウォッチ 空飛ぶクジラとダブル世界の大冒険だニャン!」では、この役を人気俳優の斎藤工が演じた。「少年ジャンプ」に二〇〇八年から一二年にかけて連載された漫画に「ぬらりひよんの孫」がある。単行本は二五巻あり、アニメ化もされた。この作品では、ぬらりひよんが関東における妖怪の任侠団体「奴良組」初代総大将とされている。

(注15) 多田克己「絵解き画図百鬼夜行の妖怪」(『季刊怪』第貳号一九九八年五月)

(注16) 岩波文庫『近世風俗志』(五)一三三頁

(注17) 医師乗物については、中条流の女町医師の乗物ではあるが、『江戸名物鹿子』(享保十八豊嶋治左衛門・弥右衛門撰)の上巻二三裏に図がある。『守貞謄稿』・『画図百鬼』ぬらりひよん図のものと見合わせ、三者とも江戸医師乗物と見てよい。

(注18) 『閑筆筆記』は日本随筆大成第一期十七、「塵塚談」は明治四十年版『燕石十種』本をテキストとした。小川二十歳頃とある部分三十歳頃とする本もある。『燕石十種』通りだと宝暦年間、三十歳だと明和年間のこととなる。

(注19) 『日本庶民生活史料集成』八見聞記編(三一書房一九六九)の六八七頁

(注20) 『三田村鳶魚全集』巻一四所収「お医者様の話」に井上交泰院方正のエピソードが載る。宝暦七年六月二八日のこと、歌舞伎役者大谷広治の病が膏肓に入って、名だたる医師の治療もかなわぬ

ところへ、方正が城から退出した帰りに診療に寄った。しかし脈をみたあと、方正は「中々薬師如来出現し給ふ共、本服不可有。無是非仕合かな。今日中は可過らず。惜しい役者を今日殺す。けふはいかなる悪日ぞや」と広治の声色を使いながら帰ったという。これは馬場文耕の『頃日全書』から引かれているが、そこには「きたひのうわき医師、年は七十に及で、かゝる事は人品のそこねし事也。町人の病氣にひと見廻、座敷へ茶子を手づかみにして喰いながら駕籠に乗るなど、さつては下卑の不信仰たつといへ共、時に逢ふといふべし」とコメントされている。鳶魚が『享延曆世説』から紹介する寛延四年の落書に方正は「豆腐」に喩えて揶揄されている。石燕「ぬらりひよん」図の背景に雪をかぶった笹が描かれていて、江戸で笹の雪といえは豆腐だから、石燕のぬらりひよんは井上方正法印を示唆しているのかもしれない。『画図百鬼』刊行時点では、明和元年に崩じた方正を次男の玄高が継いでいた。服部敏良著の「江戸幕府の医官譜」によると、この人は安永元年から寄合医から奥医師に出世している。

（注21）小学館新編『日本古典文学全集六五』『浮世草子集』七九、八〇頁。  
『角川古語大辞典』で「ぬらりひよん」を引くと、『西鶴五百韻』から「秋の霜しろひ男はぬらりひよん」の例が出ている。霜にまぎれて見分けがたいというのであって、これも、のっぺらぼうのニュアンスを含んでいる。ところが「化物づくし」「百怪図巻」や石燕の「ぬらりひよん」には、のっぺらぼうのイメージはなく、その点では西鶴句や『敗毒散』の「ぬらりひよん」が表すものと異なる。後述の通り、「ぬらりひよん」の語には「つかみがない」「とらえがたい」の意味があるから、妖怪絵巻や石燕が描くものは、

正体とらえがたく、神出鬼没であるというまでであろう。